日本科学哲学会第 57 回（2024 年度）大会シンポジウム
「感情の科学と哲学」*

オーガナイザー
鈴木 貴之（東京大学）
提題者
大坪 庸介（東京大学）
大平 英樹（名古屋大学）
戸田山 和久（大学改革支援・学位授与機構）

20 世紀後半、心理学においては、人間は少数の基本的な感情を普遍的に有しているという理論が有力となった。その後、行動経済学などの研究によって、感情が人間の意思決定において重要な役割を果たしていることが明らかになり、認知神経科学などの研究によって、感情の生理的基盤の解明も進んだ。これら一連の研究から生まれた感情観は、哲学者にも共有されつつある。しかし、近年では、構成主義を唱えるバレットのように、現在の標準的な感情観に異を唱える人々も現れつつある。本シンポジウムでは、感情に関する科学研究における現在の重要な争点を確認するとともに、そこに科学哲学はどのように貢献しうるのか、感情に関する科学研究の成果は哲学にどのような含意をもつのかを考えたい。

- 「進化心理学における感情と行動」
  提題者：大坪庸介（東京大学）
  - 進化心理学では、感情を強い主観的経験（フィーリング）を伴う動機づけとみなす傾向がある。これは、主観的な経験がどれほど強いとしても、単にフィーリングを有するだけでは（それが行動に結びつかないのであれば）その個体の適応度が変化しないためである。今回の発表では、Calin O'Connor の罪悪感の進化モデル等を参考にしながら、適応論的アプローチにおける感情と行動の関係について考察する。

- 「基本情動理論と心理構成主義」
  提題者：大平英樹（名古屋大学）
  - 心理学の感情研究では 1970 年代より、少数の生得的な基本情動とそれに特異的な神経回路の存在を主張する基本情動理論が優勢であった。近年、さまざまな反証により基本情動理論の批判がなされ、Barrett らは経験される情動は身体反応（内受容感覚）を基盤としつつも、経験や概念によりそれをカテゴリー化されることで生じるという心理構成主義を提唱している。これに対して Scarantino らは新・基本情動理論を主張することで反論し、心理構成主義も論争を経て洗練されつつある。ここでは、これらの論争を振り返り、将来統一的な感情理論が生まれる可能性について考える。

- 「感情が自然種でないかも？それがどうした」
  提題者：戸田山和久（大学改革支援・学位授与機構）
  - タイトル通りのことを主張します。Paul E. Griffiths の What emotions really are? (1997)が典型的ですが、哲学者は感情が自然種かどうかということを気にしてきました。どうも自然種ではなさそうだよというあたりに落ち着いたかに思っていたら、バレットの論文を契機にしてこの「感情は自然種かどうか問題」が再燃し、心理学者にも飛び火したかのような状況になってきました。しかし、私は思うのだ。どうしてどいつもこいつも感情が自然種かどうか、という形而上学的問題が大事だと思っているのか。さらに、感情が自然種でないと困ってしまう、と思っているらしい。そんなことはあるもんか、と思うので、そのことを主張します。

---

*共催：「分析哲学における新たな哲学方法論の可能性の検討」（22K00004）
（代表者：鈴木 貴之）